

記憶と直観——ヴラジーミル・ナボコフの
『ドン・キホーテ』論
Memory and Intuition: Vladimir Nabokov's
Reading of *Don Quixote*

鈴木 聡
SUZUKI Akira

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

1. お伽噺としての作品
2. 作品の同時代性
3. ドン・キホーテの影
4. 狂気と良識

キーワード：ヴラジーミル・ナボコフ、ミゲル・デ・セルバンテス、『ドン・キホーテ』、ジャンル、文学史

Key Words: Vladimir Nabokov, Miguel de Cervantes Saavetra, *Don Quijote de la Mancha*, genre, literary history

【要旨】

ヴラジーミル・ナボコフはスペイン語を習得していなかったが、ハーヴァード大学でミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』（1609年、1615年）について講義する機会に（英語訳に依拠しつつ）この作品を詳細に研究した。細部を疎かにせず、テキストに実際に書かれていることがらにひたすら徹底的に拘ろうとする点で、ナボコフは飽くまでも完全主義的である。取り扱う対象が分け隔てされることはない。『ドン・キホーテ』について論じるにあたって、彼は、ただたんに自分がよく知らない作品に挑戦しようとしただけではなかった。『ドン・キホーテ』に関して研究者たちや批評家たちがこれまで論じてきた内容のうちに、多くの



固定観念や先入観が含まれていたと指摘することにより、ナボコフは、作品の真の姿を明らかにしようとする。それは、一面から言えば、「これまでに著されたなかでもっとも酷薄で残忍な書物のうちの一冊」である。また、長篇小説の進化の歴史からいえば、十七世紀当時には、長篇小説は、「……私たちがそれらについて記憶し、知っているように、作中人物が事件を記憶し、知っているように感じられるとき、作品全体に浸透しているような意識的記憶を、いまだ発達させてはいなかった」という点を銘記しておく必要がある。作者を救い、作品に統一性を与えるうえで、重要な役割を果たしたのは、セルバンテスの「天才ならではの直観」であったとナボコフは主張するのである。

Though Vladimir Nabokov had no knowledge of Spanish, while preparing lectures at Harvard University he meticulously studied Miguel de Cervantes' *Don Quixote* (1609, 1615) (relying on an English translation, of course). Always a perfectionist, Nabokov never abandons individual details and consistently focuses on what is actually written in the text. Discrimination seems not to be needed according to the subject. In discussing *Don Quixote* he does not simply try to challenge a work he is not well-acquainted with. By pointing out that what scholars and critics have discussed about *Don Quixote* were based on stereotypes and assumptions, Nabokov tries to reveal the real picture of the work, "one of the most bitter and barbarous books ever penned." In terms of the history of evolution of the novel, it is necessary to bear in mind that in the seventeenth century, the novel "had not yet developed. . . conscious memory permeating the whole work, when we feel that the characters remember and know events that we remember and know about them." Nabokov asserts that it is "the intuition of genius" Cervantes had that plays an important role in saving the author and giving his work unity.

1. お伽噺としての作品

ヴラジーミル・ナボコフが、コーネル大学において開講したヨーロッパ文学ならびにロシア文学に関する授業の内容は、フレッドソン・パワーズ編集による二冊の講義録¹⁾によって概要を知ることができるが、それらとは別個に公刊されているものとしては、1952年春学期にハーヴァード大学で開講された、ミゲール・デ・セルバンテスの長篇小説『ドン・キホーテ』（1609年、1615年）——正確を期していえば、『機智溢れる郷士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ前篇』ならびに『機智溢れる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ後篇』²⁾——に関する講義の覚え書きと原稿がある³⁾。

1940年、アメリカ合衆国に居を移した時点においてすでにナボコフは、将来、文学教育に携わる機会が訪れることを念頭に置いて、講義に用いるための原稿をある程度準備していた。さらに、その後、実際に大学における講義⁴⁾を担当するようになってからは、授業全体の組み立てを考慮して不十分と思われる部分について、エドモンド・ウィルソンの助言を仰ぎ⁵⁾、それが契機となって、従前は重要視することのなかったジェイン・オースティンとチャールズ・ディケンズの作品を見直し、詳細に読み解いてみることとなったのだ。

ナボコフが、1951年から52年にかけての休暇年度を利用してハーヴァード大学に出講したさいに、『ドン・キホーテ』を題材として選んだ経緯にも、他者の助言ないしは意向が反映していたことがわかっている。一般教育課程の科目のひとつである「人文科学二 長篇小説」と題する授業の本来の担当者であったハリ・レヴィンの代理を務めるにあたり、ナボコフは、長篇小説の歴史的展開の実質的な出発点にあたる作品として、『ドン・キホーテ』を最初に取りあげるのが妥当だと勧められた。そのため彼は、従来の授業計画⁶⁾——『ドン・キホーテ』のあとに、ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの『若きヴェルターへの悩み』(1774年)、ディケンズの『荒涼館』(1852-53年)、ハーマン・メルヴィルの『白鯨』(1851年)、レーフ・トルストイの『戦争と平和』(1865-69年)が続く——の導入部をそのまま踏襲することにしたのである⁷⁾。

講義の冒頭でナボコフは、長篇小説のうちにいわゆる「現実生活」を探り当てようとするという致命的な錯誤を避けるために最善を尽くすべきだと、受講者たちを戒めている(Nabokov 1983: 1)。コーネル大学における講義でも表明されていた基本的姿勢が一貫していることは明らかであろう。「事実とされる虚構」と「虚構とされる事実」のあいだに一致を生じさせようとする(あるいは両者を安易に混同してしまうこと)は厳に慎まなければならないというのが、ナボコフの主張なのだ。その点とともに忘れてはならないのは、『ドン・キホーテ』が、それに続けて取りあげる予定となっている『荒涼館』、ニコラーイ・ゴゴリの『死せる魂』(1842年)、ギュスターヴ・フローベールの『ボヴァリー夫人——地方風俗』(1856年、1857年)、トルストイの『アンナ・カレーニナ』(ナボコフの表記にしたがえば『アンナ・カレーニン』、1873-77年)と同様に、「お伽噺」と称されて然るべき作品だということである。

『ボヴァリー夫人』に関する講義を取りあげた論攷⁸⁾のなかですでに触れたように、お伽噺とは、ナボコフが、オースティンの作品(『マンスフィールド・パーク』[1814年])とディケンズの作品について学んできたコーネル大学の学生たちにたいして、両作品と共通するこの作品の性格を指摘し、それを簡潔に定義づけるために用いた語であった。「この連続講義に登場するすべてのお伽噺のなかで、フローベールの長篇小説『ボヴァリー夫人』はもっとも

ロマンティックなものだ。文体的には、それは詩が行なうと想定されていることを行なう散文である。」⁹⁾

この独特の用語が指し示しているものとは、現実の歴史的、社会的状況とは無関係に、自律的に存立している虚構作品のありかたであるといちおう考えておいて構わないだろう。表面上、文学的テキストが、ある特定の時代、ある特定の社会を活写しているように見えることも間々あることは疑いない。だが、その実、それらの作者たちの狙いが、「実際の価値」の喧伝などと無縁であることもまた自明なのだ。むしろ、そのような価値とは別次元において、作品は不滅の生命力¹⁰⁾を保ってきたといったほうが適切なのかもしれない。その点を、ナボコフはコーネル大学における講義のなかで繰り返し強調したのであり、ハーヴァード大学で講義を行なうにあたって、信念の揺らぎは聊かも生じなかったということになるだろう。

ナボコフにいわせるならば、「それらのお伽噺」が存在しなければ、この世界は現実的なものではなくなる。つまり、それ自体が「本来の世界」にほかならない虚構作品とその読者たちを取り巻くいわゆる現実のあいだの差異が意識されることにより、現実生活とそれを支える事実が、実際にはいかなるものなのかをめぐる省察が可能となるということでもあるだろう。その結果、明確になるのは、みずからの現実生活の主たる拠り所をいずこに求めるにせよ——根拠とされるものが、「新聞」であろうが、「五つにまで切り詰められた感覚の集合」であろうが——「平均的人間」そのものが、「虚構の断片」、「統計的數字の塊」にすぎないということなのである。

結局のところ、現実生活という観念が、「一般論の体系」によって支えられているところに問題がある。ナボコフが、個別の事象を安易に関連づけたり、総体としてまとめあげたりする種類の論法にたいして抱いている懐疑は、1926年にロシア語で執筆した「一般論について」と題するエッセイ¹¹⁾の頃から一貫していると見てよい。現実生活（と称されるもの）の事実（と称されるもの）が、虚構作品と触れ合う瞬間があるとしても、それは単に一般論として、辛うじて成立しているにすぎない。虚構作品が虚構作品としての細部をより確固たるものとすればするほど、現実生活からの遊離あるいは隔絶はよりいっそう顕在化することとなる。

そのいっぽうで、「虚構におけるある種の一般論と人生におけるある種の一般論」（Nabokov 1983: 2）のあいだになんらかの照応関係が存在することもまた確かなのだ。「肉体的な、あるいは心的な苦痛……あるいは夢、あるいは狂気、あるいは親切心、慈悲、公正などといったことがら」——そのような人間生活における一般的要素は、「虚構作品の巨匠たち」の手に委ねられるとき、どのようにして藝術へと「変質」させられるか。その様態を仔細に検討してみよう、ナボコフは学生たちに勧めているのである。

議論を先回りする形で述べてしまうならば、講義その他の場で言及したことがある他の多くの文学作品の場合とは異なり、『ドン・キホーテ』——「これまでに著されたなかでもっとも酷薄で残忍な書物のうちの一冊」(Nabokov 1983: 52)——は、ナボコフの深い愛情の対象とはなり得ていないようだ。にもかかわらず、すべての章(前篇全五十二章、後篇全七十四章)の梗概を綿密に作成していることから窺い知れるように、彼は、この作品の実像をつぶさに再構築することに惜しめない努力を傾注したのである。その過程で、前篇と後篇を通して、ドン・キホーテが経験する四十回に及ぶ戦いの勝敗は、(一般に抱かれている印象とは異なり)完全に五分五分(二十勝二十敗)であることが判明する(Nabokov 1983: 89-110)。それらの挿話が総体としてかたちづくっている「ある種の均衡とある種の統一性」(Nabokov 1983: 89)は、「藝術的構造」固有の特質にほかならないとナボコフはいうのである。

かつてナボコフは、『ドン・キホーテ』の戯曲化を構想したことがあった¹²⁾。また、ウェルズリー大学で教えていた当時には、授業中の余談として、暴政に抵抗しようとした帝政ロシア時代の知識人階級が、みずからを風車に突きかかろうとするドン・キホーテ(前篇第八章)に擬えていたことに触れたこともある¹³⁾。とはいっても、スペイン語を解さないナボコフにとって、『ドン・キホーテ』という作品にたいする関心は、飽くまでもそのような逸話から瞥見し得る程度に留まっていたと見るべきであろう。彼にしてみれば、そうした作品について、大人数の教室で講じなければならなくなることは、誠に不本意であったに相違ない。しかしながら、いざ取り組む段になれば、どのようなテキストに立ち向かう場合とも変わることなく、妥協を図ることはあり得ないのだった。

2. 作品の同時代性

細部を疎かにせず、実際に書かれていることがらにひたすら徹底的に分け入ろうとする点で、ナボコフは飽くまでも完全主義的であって、取り扱う対象に応じて差をつけるようなことがない。しかも、『ドン・キホーテ』を取りあげた講義の場合、彼は、単純にテキストに挑戦しようとしただけではなかった。この作品をめぐる、多年に亘り批評家たちが営々と築きあげ、定着させ、読者が予め抱き得るようになった、固定観念や先入観のようなものに真っ向から異を唱え、それらを払拭しようと努めたのだった。その振る舞いには、虚構の登場人物であるドン・キホーテそのひとのそれを多少なりとも髣髴させるところすらあるといっても、さほどのはずれではあるまい。

他の作品にたいしてもそうであったように、ナボコフは、作品が内包する自律的秩序をなによりも尊重しつつ、それが源泉とし、あるいは素材として利用している時代的、地理的諸条件を詳細に吟味することも重要視している。『ドン・キホーテ』の場合でいえば、この作品が、

騎士道ロマンスと呼ばれるジャンルと関連し、それにたいしてなんらかの介入を行なおうとしている点は看過できない。さらにここでは、十七世紀初頭においてすでに三百年ほどの歴史を闊した、そのジャンル自体が時代錯誤的なものと見なされているのと同様、舞台設定もまた、本来的な騎士道ロマンスとは大きく懸け離れたものとなっている。周到的な異化効果が仕込まれていると称しても過言ではあるまい。

その点を踏まえていうならば、「ラ・マンチャのある村 [lugar]」(Cervantes 2015: I. 1. 27)¹⁴のような場所に関する記述は軽視しがたいはずだ。ところが、非現実的な妄想に囚われた登場人物(たち)を中心とする作品にふさわしい事態というべきことなのか、そこにあつては、妄想と対照されるべき場所の描写もまた、かなり現実性に乏しいものと化しているのである。というよりも、本当らしさの追求が敢えて避けられているといったほうが妥当であろうか。その点をナボコフはより辛辣に指摘している。「ゴーゴリが中央ロシアについて知らないのと同様、セルバンテスもスペインのことをあまり知らないのだ。」(Nabokov 1983: 4)

レヴィンの言葉を借りるならば、「経験を積んだ収税吏」¹⁵であり、国内各地の町から町へ移動することが常であったセルバンテスが、自分の国についてよく知らないというのは到底あり得ないことではないかとも思われる。だがナボコフは、飽くまでも舌鋒鋭く言葉を重ねる。前篇の結尾に近い箇所にアルガマシーリャという具体的な地名が現われること(Cervantes 2015: I. 52. 530)¹⁶についても、実在するアルガマシーリャ・デ・アルバ(あるいはアルガマシーリャ・デ・カラトラバの可能性もある)と冒頭の「ラ・マンチャのある村」を同一視しようとする臆説があつたことを踏まえながら、セルバンテスはその村についてもなにひとつ知らないのだと断定するのである。

そのような主張は主張として理解し得るものの、それにしても、「場所に関するセルバンテスの無智は徹底的かつ絶対的である」(Nabokov 1983: 5)¹⁷というのは、極論であるように思われる。「作者は、特定の、確証し得るような描写を回避している」というのが真実に近いのではあるまいか。「四つないしは六つの州」を経由するドン・キホーテの巡歴の跡を辿ることはほとんど不可能であり、北西部のバルセローナに達するまで¹⁸、名前を知られた町に到着することもなければ、川を渡ることもない。このような点をセルバンテスの杜撰さや無計画性¹⁹を例証するものとして解釈することももちろん可能ではあるだろう。しかし、現実との整合性がそもそも意図されていないのだとすれば、地理的な正確さをはじめとする本当らしさが欠如していることをことさら問題視するには及ばないようにも感じられてくるのである。

「寄せ集めの、行き当たりばつたりの物語」(Nabokov 1983: 28)である『ドン・キホーテ』が、もともと「極めて初期の、極めて原始的な長篇小説の類型」(Nabokov 1983: 11)に属していることは等閑に付されるべきではあるまい。たとえば、後年の長篇小説の多くとは異なり、

この作品においては、ごく稀に風景描写が挿入されることがあっても、粗笨な、型に嵌まったものに留まっている。セルバンテスが自然にたいして注ぐ愛情を認め得るとしても、それは、イタリア・ルネサンスの文学作品と同工異曲のものでしかないのだ (Nabokov 1983: 33)。

言語による風景描写が、十九世紀初頭に到るまでほとんど発達することがなかったのにたいして、『ドン・キホーテ』のなかでももっとも印象的な場面をかたちづくる対話は、その二百年まえまでにすでに、洗練された、「自然かつ融通無碍、色彩豊かで、生き生きとした」(Nabokov 1983: 32) 表現を自在に駆使し得る水準に達していた。対話は、ナボコフが『ドン・キホーテ』における「構造上の仕掛け」(Nabokov 1983: 29) と呼んでいる十の項目——1. 古いバラッドの断片、2. 諺、3. 言葉遊び、4. 劇的対話、5. 擬似 - 詩的な自然描写、6. 捏造された歴史家 (具体的にはシーテ・ハメーテ・ベネンヘーリ²⁰⁾ を指している)、7. ジョヴァンニ・ボッカチオの『デカメロン』(1348 - 53年) と同種の小品物語、8. アルカディア的 (あるいは牧歌的) な主題、9. 騎士道の主題、10. 瞞着の主題——のひとつであるが、そのなかでも最優先的に扱われているもののようである。

おそらくは、みずからの担当する授業が文学史としての性格を有していることを意識したうえでのことだろうが、ナボコフは、年度前半 (秋学期) の授業で学生たちが叙事詩の歴史全般を把握したことを前提としながら、叙事詩の進化にともない、韻律が捨てられ、「娯楽的な語り」に特化した散文形式 (Nabokov 1983: 5) との交雑を経て、長篇小説という形態が誕生したことに言及していた。そのような様式の歴史的展開という観点から見て、『ドン・キホーテ』をどのように位置づけるかは重要な論点となり得るはずだ。

騎士道ロマンスの構成要素の換骨奪胎ならびに戯画化を中心的な手法として用いるいっぽうで、この作品のうちには、ピカレスク長篇小説と呼ばれるジャンルとの関連性を見て取ることも可能である。冒険の旅——「多少なりとも反社会的あるいは非社会的な探求」(Nabokov 1983: 11) ——に乗り出した主人公が、さまざまな人物と出会い、次から次へと事件に巻き込まれるという定型的、約束事的なパターンに即して、挿話が連続するところ、抒情的、悲劇的な内容よりも喜劇的な側面に力点が置かれるところなどに、『ドン・キホーテ』との類似が認められることは間違いない。さらにこのテキストには、劇作家としての経歴を積んできたセルバンテスの一面も反映しているというべきであろう。ナボコフが巧みな対話の一例として取りあげている (Nabokov 1983: 32-33)、サンチョ・パンサとその妻テレサ・パンサのあいだで「会話」(plática) が交わされる後篇第五章²¹⁾ (Cervantes 2015: II. 5. 581-87) などは、まさしく戯曲中の一場面であるように映らなくもないのだ。

簡単にいってしまうならば、『ドン・キホーテ』は、セルバンテスの才覚と叡智、文学者としての技倆と蓄積によってかたちづくられ、その結果、図らずも同時代における文学の諸相を

集約するに到った作品である。その点は、直接的な影響関係の有無よりもむしろ遙かに重要だ
というべきかもしれない。セルバンテスとウィリアム・シェイクスピアが、偶然にも、ともに
1616年四月二十三日（聖ゲオルギオスの日）に亡くなったとされること²²⁾自体に深い意味
はない。とはいいいながら、彼らが生きたのはどのような時代であったか、その時代にどのよう
な種類の作品が書かれたかということは、ある程度考慮に入れておく必要がある。

そのいっぽうで、偉大な（と称される）文学者たちの作品を安直に比較してみたがる批評家
たちの姿勢（あるいは心性）²³⁾にたいしては積極的に疑問を呈すべきだと、ナボコフは考えて
いるようだ。セルバンテスとシェイクスピアのそれぞれの藝術的達成を同格であるかのごとく
論じる向きには、はっきりと異を唱えなければならない²⁴⁾。シェイクスピアの戯曲『リア王
の悲劇』（1606年初演）との相似性を各所で指摘しながら、ナボコフは、「ケントの高貴
な心も、リア王の道化の一風変わった抒情的な口振りも、サンチョ・パンサのうちに具現され
ていると称することはできない」（Nabokov 1983: 21）と断じる。「『ドン・キホーテ』は、
『リア王』に傳っている[squires]にすぎない」（Nabokov 1983: 8）というのが彼の見解な
のだ。書物自体から独立した影響を長く残しているという点で、セルバンテスはシェイクスピア
に比肩し得るだろう。だが、そうした影響力が仮にないとしても、シェイクスピアの戯曲には、
永続的な生命力が備わっているというのである。

このような一連の主張が端的な例となっているように、ナボコフは、セルバンテスに関する
既存の批評を突き崩し、それらが固定観念や紋切り型の発想に支配されていることを厳しく糾
弾することをみずからの使命と心得ているものと思われる。「もう亡くなって久しい、誰なの
かよくわからない少数派の批評家たちは、『ドン・キホーテ』が陳腐な笑劇にすぎないことを
証明しようと努めた。他の人びとは、『ドン・キホーテ』はこれまでに書かれたなかでもっと
も偉大な長篇小説であると主張した。百年まえ、サント＝ブーヴという、ひとりの熱狂的なフ
ランス人批評家は、この作品を『人類の聖書』と呼んだ。このような魅惑者たちの言葉に魅了
されないようにしなければならない。」（Nabokov 1983: 7）シャルル＝オーギュスタン・サ
ント＝ブーヴの言葉は、講義にあたってナボコフが参照した英語訳（1949年）の翻訳者サ
ミュエル・パトナム（哲学者ヒラリー・パトナムの父）が、完訳版にもとづく抄訳板（195
0年）に寄せた序論から引かれたものらしい²⁵⁾。

パトナムが名を挙げているオーブリー・F・G・ベルやジョウゼフ・ウッド・クラッチの（当
時から見れば比較的近年の）著書²⁶⁾も、ナボコフの異議申し立ての対象となる。それらの批評
家たちを例として、彼は、セルバンテスの作品を論じるにあたり、その感受性、精神、想像力、
諧謔を愛好する気質を、シェイクスピアの有するそれらと同等のものとして論じる傾向がある
ことを難じているのだ。そうした偏った見かたが、ナボコフにとって論外であることはすでに

述べた。だが、そのほかにも問題点がある。「私たちの知る穏健な性質の持ち主たる註釈者たち——たとえば、オーブリー・ベル——は、この書物の背景をなす国民性に由来する一般的性格は、感受性豊かで、機智に富む、諧謔を愛好し、慈愛に満ちた民衆のそれと同じだと主張しているが、それは真実とはまったく異なっている。」 (Nabokov 1983: 52)

『ドン・キホーテ』をめぐるのは、囂しい意見の対立がある。批評家や研究者の立場に応じて、対抗宗教改革の時代にあつて、作者と作品をどのように位置づけるべきかに関する見解が分かれることなども一例となるだろう。場合によっては、ドン・キホーテひとりだけが偏執狂であったわけではなく、「十六世紀のスペインは、単一の観念に憑かれた人間という、同じ〔病理学的〕類型に属す狂人たちによって蹂躪されていた」 (Nabokov 1983: 9) ²⁷⁾とする極端な断定がなされることすらあるのだ。

しかしながら、セルバンテスが「良きカトリックであつたか、悪しきカトリックであつたか」、「善人であつたか、悪人であつたか」などといったことがらは、ナボコフにとってはまったく問題とはならない。彼が関心を抱くことができないというよりもむしろ、セルバンテス個人が、同時代の状況をあれこれ思い煩うことがなかつたのではないかと推測されているのである。このようにしてナボコフは、英語訳に依拠しつつ『ドン・キホーテ』論を開陳するという制約を逆手に取るようにして、英語圏（ことにアメリカ合衆国）における受容と批評の現況に主眼を置き、多くの論者たちの主張——作品中に蔓延する「残酷さ」を敢えて無視するようにして、これを「優しい人道的な作品」 (Nabokov 1983: 15) として持ちあげる評価など——が、作品の実像を極度に歪めてしまっている点を明らかにすることにより、みずからの立場を示すという途を選んだのだともいえるだろう。

3. ドン・キホーテの影

他の長篇小説作家たちを扱うときも、『ドン・キホーテ』は常に「われわれとともに留まり続ける」 (Nabokov 1983: 11) とナボコフは述べる。ドン・キホーテという作中人物の多面性——「気紛れな高貴さ」、「擬似ピカレスクのパターン」 (Nabokov 1983: 11-12)、「ロマンティックな蛇行」 (Nabokov 1983: 12) ——が、講義で取りあげることになっている他の作品——『荒涼館』²⁸⁾、『死せる魂』²⁹⁾、『ボヴァリー夫人』³⁰⁾、『アンナ・カレーニナ』³¹⁾——のなかにいわば影を投げかけているということなのだ。

『ボヴァリー夫人』が単線的で、『アンナ・カレーニナ』が複線的であることに引き比べて、『ドン・キホーテ』は一線半的 (one-and-a-half track) な長篇小説と呼ぶべきではなかろうかとナボコフは提案していた (Nabokov 1983: 10)。彼が着目しているのは、中心的登場人物がひとりなのか複数なのか、プロットがひとつなのか複数なのかという点であつて、その他の場

合、たとえば、視点人物が複数存在し、それぞれの視点からの叙述が組み合わせられる事例³²⁾があることなどはまったく配慮されていないように思われる。

取りあえずのところ、『ドン・キホーテ』においては、中心的登場人物はふたりいると見なしても差し支えなさそうに思われる。どちらかいつぼうの視点に準拠して呈示される、個々の経験のみに限定された章が存在することもまた確かである。ことに後篇第四十四章から第五十五章にかけて、公爵夫妻の企みによって、バラタリア島 (Cervantes 2015: II. 45. 888) —— 実は島ではなく、バラタリオという人口千人ほどの村である——の太守に任命されたサンチョ・パンサが、ドン・キホーテから切り離されてからは、章の進行にともなって両者は交互に登場するようになる³²⁾。しかし、「騎士と従者は実際には一体である」とナボコフも述べているように、物語が完全に分岐することはあり得ない。ふたりは、運命によって結び合わされるようにして再会を果たし、物語は（予め定められていた通り）一点に収束することになるのである。

その意味からいえば、『ドン・キホーテ』の大部分は、ナボコフの用語でいう単線的な長篇小説に限りなく接近していると見たほうが適当であろう。多少横道に逸れることがあるとしても、テキストの中心たるドン・キホーテひとりに一貫して重点が置かれていることは疑いがないからだ。「唯一無二の個人」(Nabokov 1983: 13)であるドン・キホーテを造型するにあたって、セルバンテスは、「個人としての描きかた」(Nabokov 1983: 20)に工夫を凝らした。それにたいして、「一般化の産物」にほかならないサンチョ・パンサの人物像は、ドン・キホーテほど細密に書きこまれない。

決して同格とは呼べない両者の関係を顧慮せずに行なわれてきた、既存の研究者、批評家たちの議論には到底首肯することができないとするところに、ナボコフの姿勢を見て取ることができよう。ルードルフ・シェヴィル（「著名ではあっても凡庸な批評家」[Nabokov 1983: 22]）³³⁾のように、サンチョ・パンサを、没我的で旧弊なドン・キホーテの対極に位置する実利主義者、現実主義者として捉えるにせよ、サルバドール・デ・マダリアーガ（「勘の優れたスペインの批評家」）³⁴⁾のように、「別の調」(Nabokov 1983: 23)に移調された別種のドン・キホーテとして捉えるにせよ、その性格が、主人との対比のうえにはじめて成立していること——その意味においても、両者が実質的に一心同体であること——は自明だからである。

後篇第七十四章で、臨終の床にあるドン・キホーテはサンチョ・パンサにたいして、この世には「遍歴の騎士」(caballeros andantes)なるものがかつて存在し、いまも存在するのだという謬見に陥れ、自分と同様の狂人と見なされる機会を生じさせてしまったことを詫びる (Cervantes 2015: II. 74. 1102)。その時点で彼はすでに、自分がもはやドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャではなく、「善人」(bueno)と呼ばれたアロンソ・キハーノ³⁵⁾に立ち戻ったこ

とを認めていたのだった (Cervantes 2015: II. 74. 1100)。それ以前にも、後篇第七十二章の末尾で、故郷の村をまえにして気分を昂揚させているサンチョに向かって、ドン・キホーテは、「莫迦げたこと」(sandeces)を口に出すことなく、想像力を自由に働かせて、「牧人生活」(la pastoral vida)の計画に専念したほうがよいという警告を発していた (Cervantes 2015: II. 72. 1093)。

『ドン・キホーテ』後篇においては、「サンチョ・パンサの精神が現実から幻想へ上昇するのにたいして、ドン・キホーテのそれは幻想から現実へ下降する」というマダリアーガの指摘は一考に価する。ナボコフも、書物の結尾までに、両者のあいだでは「夢想と運命」の交換が生じるに到ると指摘しているが、それが過程を踏んで、段階的になされている点に留意する必要があるだろう。彼によれば、サンチョ・パンサは「ドン・キホーテよりも慎重な戦士」であるとされる。その表現は、確かにいくつかの場面にあてはまるといってよい。にもかかわらず、そうした慎重さは徐々に失われてゆく。あるいは、ドン・キホーテが(本来のアロンソ・キハーノとして)正気を取り戻すにつれて、無意味なものと化してゆくように思われる。いずれにしても、サンチョ・パンサが単独で前面に浮上してくる機会は限られているのだ。さまざまな角度から眺めてみても、結局のところ、彼が従属的な地位に留まっていることは否定し難いように思われる。

しかし、物語の構成要素として見る場合には、サンチョ・パンサの言動は別の意味を帯びることもある。局面に応じて、彼は、ドン・キホーテの「引き立て役」という立場に拘束されない役割を果たしているのだ。それは、作品の全体的構造とかかわることがらでもある。その点を理解するためにまず、『ドン・キホーテ』前篇と後篇には、形式上、外見上、明らかな差異が認められるという事実を踏まえておく必要があるだろう。後篇が、単一の主題を中心とした、まとまりのある総体をなしていると思なされるのにたいして、前篇は、全体的な見通しが立たないまま書きはじめられたものらしく、結果的には、四つの部分——第一篇(第一章から第八章まで)、第二篇(第九章から第十四章まで)、第三篇(第十五章から第二十七章まで)、第四篇(第二十八章から第五十二章まで)——に分かたれることとなったのである。

第一篇は、それ自体、短篇小説を意図したかのような完結性を有している。さらに物語が進むにつれて、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが出会う人びとの身に生じたさまざまな出来事が、身の上話あるいは回顧談として打ち明けられることにより、形式的には——『デカメロン』を髣髴させるような——小品物語と同様の体裁で挿入されることがある。前篇第十二章から第十四章までに含まれた、羊飼いのマルセラと羊飼いのグリソストモの話为例として挙げることができる。前篇第二十一章でドン・キホーテ自身の口から語られる、匿名の遍歴の騎士を主人公とした物語にも、小品の雛型のような趣が認められるようだ。

前篇第二十三章以降では、ドン・キホーテがシエラ・モレーナ山地で、たまたま落ちていた鞍囊を見つけ、そこにはいついた手帖を開いてみたことがきっかけとなり、カルデーニオという人物が語る、自分と恋仲であったルシンダという女性、そして彼女に横恋慕したドン・フェルナンドという貴族（ある公爵の次男）をめぐる話が断続的に挿入される³⁶⁾。それは、ひとまずカルデーニオの視点に立って語られるが、それで完結するわけではない。あとになってドロテア——ドン・フェルナンドがもともと結婚を約束していた女性である——という別の語り手による、別の視点からなされた証言³⁷⁾が加えられるのである（前篇第二十八章）。さらにその後、カルデーニオとドロテアをとまなうこととなったドン・キホーテ一行（ほかに同じ村の住人である司祭と床屋が加わる）が宿泊した旅籠に、偶然にもドン・フェルナンドとルシンダが姿を現わし、物語は新たな展開を生じさせることとなる（前篇第三十六章）。

かくして、当初、作中人物たちが他の作中人物の身の上話を聞かされるという単純な筋立てと思われたものは、作中人物たちにとっての現在と並行し、そこに浸透するという、独自の強度を有したものと変容を遂げてゆくこととなる。そして、なおも新たな衝動が生じたかのように、テキストは、相互に繋がりをもたない³⁸⁾新たな物語を消費しようとははじめるのだ。前篇第三十三章から第三十五章にかけては、旅籠に忘れられていた鞆のなかにあった原稿と称する、「無分別な物好き」（“Curioso impertinente”）と題された物語が、客のひとりである司祭によって朗読される。前篇第三十九章から四十二章にかけては、「捕虜」(el cautivo) (Cervantes 2015: I. 37. 389) と呼ばれる宿泊客——虜囚生活を過ごしたあと、「つい最近モーロ人の国から来たばかりのキリスト教徒」(cristiano recién venido de tierra de moros) (Cervantes 2015: I. 37. 388) ——が、みずからの体験を語る³⁹⁾。

ナボコフが指摘しているように、これらの挿話の系列⁴⁰⁾を、主筋を維持することが困難になったセルバンテスが、そこに傾注すべきであった労力をより小さな単位に分散させた結果、生み出されたものとして受け止めることも不可能ではない。それにたいして、各挿話の主題論的考察を結び合わせて、作品の全体像へと発展させようとする捉えかたもじゅうぶんあり得るはずだ。いずれにしても、問題となるのは、個々の挿話が主筋から離れすぎないようにするために、作者はどのような繋がりを設定しているのか——読者の側からすれば、どのような繋がりを読み取るべきか——という点であろう。そのために作者は、他者の話に対応するドン・キホーテの態度をサンチョ・パンサのそれと対照させるという方法を取っているようだ。

騎士道という唯一の関心事との関連を見いだすことができない限り、ドン・キホーテは、他人の身の上話などにさしたる関心を寄せることがなく、むしろ語り手を妨害することがしばしばである。カルデーニオの話は、ドン・キホーテの差し出口によって中断される。それを回収することが物語の展開上、必要となることから、サンチョ・パンサが、中断された話の続きを

聞こうとしなければならなくなる。この場合とは異なり、「無分別な物好き」の朗読や「捕虜」の話が比較的、停滞なく進行するのは、ドン・キホーテがその場に同席していないからにほかならない。

それでもなお、彼は寝室で騒ぎを惹き起こしたりして、攪乱者としての自己主張を行なうことがあるだろう。主人のそのような常軌を逸した振る舞いに翻弄されながらも、サンチョ・パンサは、(ドン・キホーテとは異なり)他者とのコミュニケーションを最小限保つだけの常識は棄えているものと考えられる。その余得によって、かろうじて主従は、日常的な人間関係の境界に留まることができる。同様に、サンチョ・パンサが介在することによって、主筋と各挿話のあいだの繋がりも維持され得るようになるわけである。

サンチョ・パンサの性格は、概ね「単純さ」(simplicidad)という言葉と結びつけられて語られる。そのような側面とともに、空想癖とも決して無縁ではない彼の思考が、徐々に「主人と同様の妄想」(los mismos disparates que su amo) (Cervantes 2015: I. 29. 293)によって根深く支配されていったのも無理からぬことではあるまいか⁴¹⁾。見かたによっては、ドン・キホーテの影響と薰陶のもとによってなかばかたちづくられながら、その品性と教養は受け継ぐことなく成立したものが、サンチョ・パンサの人格であるといえなくもない。しかし、知的営為の一部において、サンチョが、ドン・キホーテに欠けている部分を補っていることもまた確かなのだ。

「いかなる記憶[memoria]も時とともに失せぬものはなく、死によって消え失せぬ苦痛[dolor]はない」というドン・キホーテの言葉 (Cervantes 2015: I. 15. 135) が端的に示しているように、『ドン・キホーテ』の作中においては、とりわけドン・キホーテの言動にかかわるさまじまなことがら、ひたすら過ぎ去ってゆくのみで、忘却に委ねられかねないことがいわば常態となっている。最初、従者となるようドン・キホーテに説き伏せられた時点ですでに、サンチョ・パンサは、そのことを察知していたのであろう。冒険ののちに、どこかの島を所領とするような機会が生じた際には、そこの「太守」(gobernador)に取り立ててやろうという約束を忘れないようにと念を押しているように (Cervantes 2015: I. 7. 74)、とくに主人にたいしてなにかを思い出させるということが、その後、サンチョの重要な務めとなってくるのである。

4. 記憶と良識

サンチョ・パンサの記憶力は、いくつかの箇所でも試されていると見ることができる。前篇第二十五章で、「思い姫」(señora de sus pensamientos) (Cervantes 2015: I. 1. 33)であるドゥルシネア・デル・トボーソ⁴²⁾に宛てた手紙をサンチョに託すにあたり、ドン・キホーテは、途中で紛失した場合に備えて、その内容を暗記させようとする。サンチョは、なにかを自

分の記憶のうちに定着させようなどとするのは莫迦げた考えだと抗議し、自分に預けられることになっている手帖⁴³⁾の二箇所か三箇所に書き留めておくことを主人に勧め、さらにそのうえで、読みあげてくれるよう懇請するのだった (Cervantes 2015: I. 25. 245)。

物覚えが悪いために、自分の名前でさえたびたび忘れることがあるほどだというサンチョ・パンサの言葉をそのまま鵜呑みにすることはできないだろう。エル・トボソに向かう途中、偶然、旅籠で、ドン・キホーテを連れ戻すために追って来た司祭と床屋に出会ったサンチョは、手紙のことを話しているうちに、主人が自分に肝腎の手帖を渡しそびれたことにはじめて気づく。しかし、そのことに聊かも痛痒を感じない。内容をほとんど完全に記憶しているという妙な自信があったからである (Cervantes 2015: I. 26. 254)

ところが、いざ語らんとすると、出てくる言葉は、途切れ途切れの、不正確なものに終始してしまう。そもそも、ドン・キホーテの手紙自体にたいする興味の有無はともかくとして、騎士道の礼法に由来するかのような凝った言葉遣いは、サンチョにとっては知識の埒外にある、異質極まるものであったに相違ない。自身の本来的な言語使用域から懸け離れたものに対応することに相当な無理がある以上、手紙の本文は、最初からほとんど理解されていなかったのだと判断せざるを得ないはずである。

いい換えるならば、暗記している手紙の文言を聞かせてほしいとせがむ司祭や床屋から嘲弄される顛末とはなつたものの、この箇所において真に問題となっているのは、サンチョ・パンサの記憶の正確性そのものではなかったと見なしてよさそうなのだ。その他の、言語的障壁などの困難が生じないような場合には、だいぶ事情が異なってくる。ドン・キホーテが述懐するところによれば、サンチョが自発的になにかを覚えておきたいと心に決めたときには、その記憶が欠落するようなことは決してない (Cervantes 2015: II. 3. 570)⁴⁴⁾。実際に、彼の記憶力は、かねてからの念願通りに島の太守 (という仮初めの地位) に祭りあげられたさいに、遺憾なく発揮されることとなるのである。

後篇第四十五章で、新任の太守は、慣例により、法廷で裁定を求められ、どのような難題にたいしてでも答を与えなければならないことになっていると、自分をその土地に派遣した公爵の執事から説明を受けたサンチョ・パンサは、三つの込み入った問題を立て続けに解決する。水際立った判決は、傍聴人たちを感嘆させずにおかないほどのものであった。そのために活かされたものが、サンチョの頓才と、人並みはずれた記憶力——法廷で証言がなされるあいだに、債務者と債権者のあいだで杖の受け渡しがあったのを覚えていたこと⁴⁵⁾——であった点は注目しよ。「もし彼がこれは覚えておこうと思ったことを残らず忘れ去るようなことがなかったならば、この島全土でもそれほどまでの記憶力はあり得ないほど、彼は優れた記憶力の持ち主だったのである。」 (Cervantes 2015: II. 45. 892)

このように、地の文においてもサンチョ・パンサは、ことあるごとに揶揄の対象とされている。それにもかかわらず、彼が記憶を甦らせ、それによってある種の劇的効果が生じる場面がこのように頻出することに関しては、多少検討を加えてみてもよいのではないだろうか。ナボコフは、サンチョの記憶力を作品全体の叙述様式と関連するものとして捉えている。「作品全体に大雑把な統一性を賦与するために、サンチョは、そこここで以前の出来事を思い出す役回りを演じさせられる。ただし、文学の進化という面からいえば、十七世紀の長篇小説——とくにピカレスク長篇小説——は、いまだ意識を発展させてはいなかった。私たちがそれらについて記憶し、知っているように、作中人物が事件を記憶し、知っているように感じられるとき、作品全体に浸透しているような意識的記憶を、いまだ発達させてはいなかった。それが展開するのは、十九世紀になってからのことである。それにたいして、私たちが読んでいる書物においては、人為的な想起ですら、行き当たりばったりで、いい加減なものでしかない。」(Nabokov 1983: 28)

このように述べる時、ナボコフが具体的にどのような箇所を念頭に置いているのかは明確にされていない。われわれとしては、たとえば、前篇第十九章でサンチョ・パンサが、ドン・キホーテの記憶から抜け落ちていた事項を改めて思い出させようとする場面などに眼を向けてみてもよいだろう。ドン・キホーテは、以前、「マンブリーノの兜」(yelmo de Mambrino)を奪取するまでは、「マントゥア大侯爵がその甥バルドビーノスの死の復讐を誓ったとき⁴⁶⁾、みずから守ったような生活」(Cervantes 2015: I. 10. 93)を自分もまた守ろうという誓いを、「万物の創造主」と「聖なる四部の福音書」にかけて立てておきながら、そのことを完全に失念していたと認めざるを得なくなる(Cervantes 2015: I. 19. 166)。おそらくは、その誓いを破った罪として、このところ自分たちの身に災難が降りかかっているのではないか。そのような危惧の念を、サンチョ・パンサは(多少わざとらしく⁴⁷⁾)表明するのである。

また、後篇第二十章においては、主従が家を出るさいに交わされた取り決めの箇条のことが持ち出される(Cervantes 2015: II. 20. 699)。そのなかのひとつとして、隣人と対立したり、主人の権威に楯突いたりするようなことがない限り、自分の思うがままに話をし一向に構わないという趣旨の約束が含まれていたとサンチョ・パンサは主張するのだ。それにたいしてドン・キホーテは、そのような約束を行なった覚えはまったくないと抗弁するしかない。彼が最初の挫折を味わって村に立ち帰ったのちに、ふたたび旅立つ準備の一環として、サンチョを従者として雇う経緯が語られる前篇第七章の該当箇所(Cervantes 2015: I. 7. 72)において判明しているのは、ドン・キホーテが「説得し約束した」(persuadió y prometió)ということと、いつかサンチョをどこかの島の太守とすることが、そのときになされた約束のひとつであったということだけなのである。

ドン・キホーテは、みずから「この世界における新たな騎士」(Cervantes 2015: I. 47. 483)であり、「すでに忘れ去られている騎士道的冒険者の使命」を復興させる第一の存在であることを自認している。このように、忘れ去ることと思い出すことのあいだで絶え間なく演じられる動的な緊張関係あるいは葛藤は、この作品における重要なモチーフとなっていると見ることができるだろう。その構図のなかでドン・キホーテが占めている位置は、両義的なものであるようだ。後篇第三十二章では、公爵夫人がドン・キホーテにたいして、「優れた記憶力」(felice memoria) (Cervantes 2015: II. 32. 798)の持ち主であるように見えるという評言を加えるが、そこで問題とされている記憶とは、飽くまでもドゥルシネア・デル・トボソに関するものに限定されているのである。

つまり、ドン・キホーテの記憶力は、ガルシ・オルドーニェス・デ・モンタルボ作の『アマディース・デ・ガウラ』(1508年)をはじめとする騎士道ロマンス⁴⁸⁾によってかたちづけられた虚構世界、ならびにその模倣にほかならない彼自身の妄想にたいして働き得る判断力と同じ範囲にしか及ばないということなのだ。より日常的な次元にかかわる記憶については、サンチョ・パンサが補助ないしは補強するしかないと考えざるを得ない。しかしながら、その正確性を検証する手立ては、畢竟、ドン・キホーテにとっては無縁のもの、彼が得ようとしても叶わぬものだけということができるだろう。

一連の遣り取りを通じて明らかとなることがらをまとめてみよう。前篇第三十章⁴⁹⁾や後篇第四十三章⁵⁰⁾で言及されているように、妄想と直接結びつかない事態に対処するとき、ドン・キホーテには、周囲に一目置かれるほど優れた、良識的判断をくだすことができるという美点がある。しかしながら、彼には、ある特定の主題にたいする固執あるいは固着という根本的な弱みがあり、それが常識的な振る舞いを妨げるばかりか、記憶の保持をも困難にしているようなのだ。そこにドン・キホーテの限界があり、そのような不備を補うために、サンチョ・パンサの存在が必要となってくるといえよう。

従者が一定の役割を果たすことにより、実際に主人の言動の矛盾が正される場合もある。だが、サンチョ自身にとっての最優先事項がそもそも利己的なものにほかならないというもうひとつの限界があることから、彼によって専有された記憶の内容が恣意的なものへと傾く可能性がある。そればかりか、記憶の保持という課題そのものも確固たる客観的基盤を予め失ってしまうこととなる。ともあれ、このようにして両者の役割分担が暫定的に定式化されていることは、取りあえず認めておいてよいだろう。その結果、なし遂げられることとはなにか。

人物造型、性格描写などとしての意義をひとまず棚あげにして、テキストを全体的に捉えるならば、記憶の喪失(あるいは曖昧化)と復元(あるいは再現前化)というパターンは、中心的登場人物たちの期待と挫折が幾度となく反覆されるという物語の基本的過程に挿入される形

で、繰り返し実体化されているものと考えることができる。観点を変えると、それは、テキストそれ自体が、物語の進行と同時に、みずからが根本的に抱えている問題点を自意識的に浮上させ、戯画化して、虚構内の出来事として表象しようという意志を有しているからこそ、生じた事態であったということもできるだろう。

作者あるいは語り手が忘却という問題に固執していることは、ペドロ親方の人形芝居にかかわる挿話が語られる後篇第二十五章の一節において、別の形で示されることになる。「私は述べるのを忘れていたが [Olvidábaseme de decir]、このペドロ親方なる人物は、左眼と頬のほとんど半分を緑色の琥珀織りの布で覆っていて、これは顔のそちら側全体になにか故障がある証拠であった。」(Cervantes 2015: II. 25. 744) このように作者あるいは語り手自身が語るべきことを忘れていたと認める瞬間がわざわざ用意されているのである。

それは、このテキストのうちにあって、記憶の永続性が常時、危殆に瀕していることを強調する目的のためだけではあるまい。実際に作者セルバンテスが、記憶を維持すること、テキスト内の先行する部分を記憶に留め、いままさに執筆している箇所と関連づけることに難渋しているのではないか。見かたによっては、作者が、テキストの既存の部分とこれから書かれることになっている部分の繋がりを統禦することに関して、聊かあやふやであるからこそ、そのような欠点(あるいは特異性)を——少なくとも自覚だけはしているのだと——敢えて強調しなければならなくなっているようにも映るのだ。

作者であるセルバンテスと作中人物であるドン・キホーテのあいだに、ある種の共通性あるいは親和性が認められることをナボコフは主張している。「セルバンテスは、作品の執筆にあたって、明晰さと曖昧さ、入念な計画と締めりのない不明瞭さを交互に経てきたように思われる。その点では、彼の描く主人公が時に応じて気が変になるのと同様なのだ。」(Nabokov 1983: 28) ここにわれわれが見て取るべきなのは、セルバンテスと後世の長篇小説作家たちとのあいだにある最大の差異であるということになるかもしれない。彼の創作過程に関するナボコフの見解は、以下のようなものだ。

「直観がセルバンテスを救ったのだった。グルーサックが指摘しているように、彼は眼のまえにある自作を、その根源にある事物の渾沌から完全に隔絶した、完璧な構造物としては見なかったようだ。そればかりではない。彼は、事態の見通しを予め立てることがなかっただけではなく、振り返ってみようとしなかった。印象としていえば、後篇の執筆にさいして、彼は書き物機のうえに前篇を一部置いておこうとしなかったのだ。ざっと読んでみることさえしなかった。前篇を思い出すとしても、それは平均的な読者としてであって、作者としてではなく、研究者としてでもない。そのようにでも考えてみなければ、彼が、『ドン・キホーテ』の偽の続篇の作者、アロンソ・フェルナンデス・デ・アベリャネーダが犯した誤謬を批判しながら

ら、同じような繋がりにおいて、同じ登場人物たちに関連して、さらにひどい誤りを犯してしまったことは説明がつかない。しかし、繰り返すならば、天才ならではの直感が彼を救ったのだ。」(Nabokov 1983: 28-29)

セルバンテスの無計画性、推敲の杜撰さ、記憶違い、それらのために生じる細部における喰い違いなどについては、十九世紀に出版された『ドン・キホーテ』の刊本(全六巻、1833-39年)の編纂者であるディエゴ・クレメンシンも辛辣な指摘を行なっている(Nabokov 1983: 110)。それを引用したあとで、ナボコフは付け加える。「さらに激烈ないいかたで、ドン・キホーテとサンチョの魅惑的な会話の記述と、ドン・キホーテの主要な冒険をかたちづくる壮麗な幻想を別にすれば、この長篇小説は、定型的な出来事、独創性に欠ける筋立て、凡庸な詩句、陳腐な書き加え、荒唐無稽な変装、信じられないような偶然などの寄せ集めにすぎないともいわれてきた。だが、セルバンテスの天才、藝術家としての直観は、これらのばらばらの素材をひとつにまとめあげ、それらを用いて、高貴な狂人と野卑な従者に関する長篇小説に勢いと統一を与えることに成功しているのである。」(Nabokov 1983: 110-11)

『ドン・キホーテ』における諧謔や滑稽の質に関しては、ナボコフは一貫して疑問を呈してきた。同時代における民衆の感覚や嗜好からすれば、無理からぬことであり得るにしても、動物や弱者が笑いの対象とされることを含めて、この作品の読者は、あまりにも頻繁に粗暴さ、残忍さに出会うこととなる⁵¹⁾。それらは、同時代の読者たちからすれば、「ありきたりなおかしみをもたらず常套手段」(Nabokov 1983: 111)にすぎないけれども、後世においては違和感を抱かれたとしても不思議はない。藝術家としてのセルバンテスの才は、そのような欠陥を乗り越えたところにあるのだ。

またセルバンテスは、モーロ人やその他の異教徒たちにたいする当時のスペインの人びとの偏見を受け容れるとともに、すべての貴族が神によって創造され、すべての修道士が神によって啓示を与えられているということを感じていた⁵²⁾。「しかし、彼は藝術家としての眼と手腕を備えており、その悲哀に満ちた主人公を創造したとき、彼の藝術が彼の偏見を超越したのである。書物の藝術性は、必ずしも自己の倫理によって影響されない。思想家としてのセルバンテスの精神は、同時代の古典的、正統的理念によって導かれると同時に拘束されている。創作者としての彼は、天才としての自由を享受している。」⁵³⁾

そもそものはじめから多様性を秘めていたドン・キホーテの像⁵⁴⁾は、『ドン・キホーテ』という作品が読まれ、多くの言語に翻訳されてゆく過程において、さらにいっそう多様性を増してゆき、いわば作品を脱却してひとり歩きするに到った。これこそが藝術家としてのセルバンテスの最大の発明であることは明らかである。『ドン・キホーテ』は、もともと騎士道ロマン

スのパロディとして書かれた作品だったかもしれない。しかし、「パロディは師表 [paragon] となったのだ。」

註

- 1) Vladimir Nabokov, *Lectures on Literature*, ed. Fredson Bowers (New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark, 1980); Vladimir Nabokov, *Lectures on Russian Literature*, ed. Fredson Bowers (New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark, 1981).
- 2) Miguel de Cervantes Saavedra, *El ingenioso hidalgo Don Quixote de la Mancha* (1609); *Segunda parte del ingenioso caballero Don Quixote de la Mancha* (1615). テキストとしては、Miguel de Cervantes, *Don Quijote de la Mancha* (Edición conmemorativa de la RAE y la ASALE) (2004; Madrid: Alfaguara, 2015) を参照し、引用箇所は括弧内の章番号とページ番号によって示すこととする。
- 3) Vladimir Nabokov, *Lectures on Don Quixote*, ed. Fredson Bowers, foreword by Guy Davenport (New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark, 1983). 引用箇所は括弧内のページ番号によって示すこととする。
- 4) コーネル大学における授業では、「十九世紀および二十世紀の英語、ロシア語、フランス語、ドイツ語の長篇小説と短篇小説」(Nabokov 1980: vii) を扱うことになっていた。
- 5) Karlinsky 2001: 262-63. Cf. Boyd 1991: 166.
- 6) Boyd 1991: 200. ボイド (ならびにパワーズ) によれば、この授業は、ジョン・H・フィンリー・ジュニアが教える秋学期の講義「人文科学一 叙事詩」(ホメーロス、ウェルギリウス、ダンテ・アリギエーリ、ジョン・ミルトン) と組み合わせになるものであったとされているが、レヴィンの回想ではやや異なり、授業名は「人文科学二 叙事詩と長篇小説」であったという。Levin 1995: 227.
- 7) 『ドン・キホーテ』のあとに続くものとしてナボコフが選んだのは、コーネル大学における講義ですすでに取りあげたことのあるもの——ディケンズ、ゴーゴリ、フローベール、トルストイ (ただし別作品) ——で、英語圏の作品が一篇しか含まれていない。Cf. Boyd 1991: 214.
- 8) 鈴木聡「移行と停滞——ヴラジーミル・ナボコフの『ボヴァリー夫人』論」(『東京外国語大学論集』第 88 号、2014 年)。
- 9) Nabokov 1980: 125.
- 10) 「エンマ・ボヴァリーという娘は存在したことがなかった。だが、『ボヴァリー夫人』は未来永劫に亘って存在し続けることだろう。」
- 11) 本文はロシア語で書かれているが、標題は英語で “On Generalities” と記されている。ニュー・ヨーク公共図書館のバグ・コレクションに収蔵されている原稿が、アレクサンデル・ドリーエンの校閲により公表された (*Звезда*, No. 4 [1999], 12-14) のち、ルーク・パーカーによる英語訳も発表された (*Times Literary Supplement*, May 13, 2016, 17-18)。Cf. Dolinin 1999: 203-04.
- 12) Boyd 1991: 23.
- 13) Boyd 1991: 36-37; Levin 1995: 226. ハーヴァード大学における講義のさいにもナボコフは、「昔のロシア」を引き合いに出し、往時、ドン・キホーテは、「高貴ではあっても懦弱な、政治的大望の抽象的な象徴」と見なされていたと述べている。Nabokov 1983: 112.
- 14) 引用にあたっては随時英語訳を参照することとし、ナボコフが自分で読み、学生たちに勧めたサミュエル・パトナムによるもの (Miguel de Cervantes Saavedra, *Don Quixote*, trans. Samuel Putnam [New York: The Viking Press, 1949]) と、J・M・コーエンによるもの (Miguel de Cervantes, *Don Quixote*, trans. J. M. Cohen, with an afterword by Ned Halley [1947; London: Pan Macmillan, 2006]) を用いる。

- 15) Levin 1995: 232. セルバンテスは1593年、グラナダ州の収税吏の職を得る以前には、海軍の——1588年頃にはいわゆるアルマーダ・インベンシーブレ（無敵艦隊）の——食糧調達係を務め、各地に出張したとされる。
- 16) その地名が用いられたこととくに意味があるわけではなく、実際には村人であるはずの「学匠たち」(académicos)が、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのために墓碑銘ならびに讃辞として数篇の詩を書き送るという設定の滑稽さと荒唐無稽さのほうに重きがあると見るべきであろう。
- 17) この表現は、講義にあたってナボコフが用いた参考文献のひとつであるポール・グルーサックの著書、Paul Groussac, *Une Énigme Littéraire, Le Don Quichotte d'Avellaneda: Le Drama Espagnol: Philologie Amusante; Hernani; Carmen* (Paris: Alphonse Picard et Fils, 1903) から借用されたものである。フランス生まれで、長くアルゼンチンで暮らしながら、フランス語で執筆を続けたグルーサックの著作は、なんらかの形で、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの短篇小説「『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール」(1939年)の執筆動機とかかわっているものと思われる。Cf. Fiddian 2017: 70-77.
- 18) 前篇第六十一章で、ドン・キホーテが、サラゴサで催される馬上槍試合で華々しい戦績を挙げることが予示され (Cervantes 2015: I. 61. 529)、後篇の多くの箇所 (第四章、第十章、第十三章、第五十七章) においても、旅の目的地がサラゴサであることが当然の前提となっているが、第五十九章で、セルバンテスが後篇を執筆していたのと同時期に出版された、アロンソ・フェルナンデス・デ・アベリャネーダの贋作 (『機智溢れる郷土ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ続篇』) の内容を作中人物が知るといふ転回とともに、唐突な変更が生じ (Cervantes 2015: II. 59. 1003-04)、ドン・キホーテとサンチョ・パンサは、第六十章で急遽バルセローナに向かうこととなる (Cervantes 2015: II. 60. 1004)。作中人物の言葉によっても明示されているように、贋作との差異を強調する狙いがあったものと考えられる。Cf. Nabokov 1983: 79-80.
- 19) Cf. Nabokov 1983: 110-11.
- 20) 『ドン・キホーテ』前篇第八章までは、匿名の作者の手になる物語が書き送られたという体裁を取っているものの、その物語は途中で終わってしまったとされる。続きを見つけ出そうと心に決めたセルバンテスは、偶然、トレードの市場で「アラビアの歴史家シーテ・ハメーテ・ベネンヘーリ」という著者名のあるアラビア語で記された数冊の「書類綴り」(cartapacios) と古い文書を入手したのだという。Cervantes 2015: I. 9. 85-86. 彼はそれらを、アラビア語とカスティールヤ語のできるモロコ人に頼んで翻訳してもらったのだった。
- 21) サンチョ・パンサが日頃とは打って変わった理智的な弁舌を駆使していることから、ベネンヘーリの原稿の翻訳者は、この章が「偽作」(apócrifo) ではないかという疑いを抱いたとする前置きのあとは、ほとんど会話だけで構成されている。なお、サンチョの妻の名は、他の箇所ではフワーナとされていた。
- 22) セルバンテスが実際に亡くなったのは四月二十二日で、四月二十三日は埋葬された日だととする説がある。Cf. Parker 2003: 97. 当時、スペインではグレゴリウス暦が用いられていたのに対して、イングランドでは旧来のユリウス暦が用いられていたため、シェイクスピアが亡くなったのは、実はセルバンテス逝去の十日まえであった。
- 23) Cf. Cervantes 1947: xxi.
- 24) このことと関連して、ナボコフが引き合いに出しているのは、彼が参考にした英語訳の翻訳者パトナムが推奨している (Cervantes 1947: vii)、オーブリー・F・G・ベルの著書、Aubrey F. G. Bell, *Cervantes* (Norman, Oklahoma: University of Oklahoma Press, 1947) である。
- 25) Cf. Cervantes (1950): 6. ナボコフは学生たちにたいして、抄訳板を完訳版と混同しないようとくに念を入れて注意していた。Cf. Nabokov 1983: viii.
- 26) ベルの著書の表題はすでに挙げておいた。クラッチの著書は、Joseph Wood Krutch, *Five Masters: A Study in the Mutations of a Novel* (New York: Jonathan Cape and Harrison Smith, 1930) である。パトナムによれば、クラッチは、セルバンテスの思考のいくつかの側面を「かのようにの哲学」と比較してみたとされる。Cervantes 1951. 7.

- 27) ここでナボコフが引用しているのは、『ドン・キホーテ』の翻訳者でもあるアレグザンダー・ジェイムズ・ダフィールドの著書、Alexander James Duffield, *Don Quixote: His Critics and Commentators* (London: C. K. Paul, 1881) である。
- 28) 「荒涼としていているとはとても呼べない邸宅のキホーテ的な所有者」であるジョン・ジャーンダイスは、あらゆる虚構作品のなかでもっとも「魅力的で興味をそそる登場人物のひとり」であるとされる。
- 29) 主人公（パーヴェル・イヴァーノヴィチ・チチコフ）の探求のうちに、「ドン・キホーテの冒険の異様で病的なパロディ」を見て取ることができる。
- 30) 女性主人公がドン・キホーテさながらの夢に耽溺しているというだけでなく、「不屈の藝術の誠実性」を達成すべく、これ以上ないほどの粘り強さをもって、書物を構築するという冒険を遂行したフローベールそのひともまた、ドン・キホーテ的であったと呼んで差し支えないというのである。
- 31) 主要登場人物のひとりであるリョーヴィンのうちに「真摯な騎士」の姿を臍気に認め得る。
- 32) 『ボヴァリー夫人』にあつては、各登場人物の視点が同時並行的に共存する場面が各所で生起していると考えられる。
- 32) 但し、第五十四章と第五十五章では、章の途中で叙述の対象が切り替わる。Cf. Nabokov 1983: 196.
- 33) ナボコフが参照しているのは、Rudolph Schevill, *Cervantes* (New York: Duffield, 1919) である。
- 34) ナボコフが参照しているのは、Salvador de Madariaga, *Don Quixote: An Introductory Essay in Psychology* (Oxford: At the Clarendon Press, 1935) である。
- 35) 前篇第一章においては、もともと姓 (sobrenombre) がキハーダあるいはケサーダであったことが示唆されていた。Cervantes 2015: I. 1. 28.
- 36) 第二十四章でカルデーニオの話が中断されるのは、ルシंगाが騎士道ロマンス(具体的には『アマディース・デ・ガウラ』[1508年])を好んだという、なにげないひとことを聞き答めたドン・キホーテが口を挟んだためであった。Cervantes 2015: I. 24. 228.
- 37) ドロテアアの言葉によれば、「私の悲劇のありのままの話」(la verdadera historia de mi tragedia)。Cervantes 2015: I. 29. 288.
- 38) 挿入されたいくつかの物語のうちに見いだされる女性の形象は、ドン・キホーテの想像力によって思い描かれた憧憬の対象、ドゥルシネア・デル・トボース(それ自体は極めて稀薄な存在にすぎない)には根本的に欠如している実体性を備えているということができる。恋愛という主題を含めて、それぞれの物語を関連づけて論じることも不可能ではないだろう。
- 39) この挿話にはレバントの海戦(1571年)当時に実在した軍人の名前がいくつか出てくることから、セルバンテス自身の経験が反映しているものと察せられる。
- 40) ナボコフにいわせるならば、「急激に迷走する挿話と挿入された話の連続」ということになる。Nabokov 1983: 28. この箇所でも彼は、マグリアーガの見解を参照している。
- 41) ドン・キホーテを村に連れ戻すためにひと芝居打つことを企てた司祭は、ドロテアアを、騎士に巨人退治を依頼するため「ミコミコン大王国」([el] gran reino de Micomicón)から訪れた「ミコミコーナ女王」(la princesa Micomicona)であると信じこませようとする。この作り話をドン・キホーテよりも先に聞かされたサンチョ・パンサは、なんら疑いを抱くことなく簡単に受け容れてしまう。
- 42) 「全宇宙の女王にもふさわしい方」とも称されているが、実際には、ドン・キホーテの故郷の村の近隣で暮らしている農家の娘、アルドンサ・ロレンソが貴婦人に擬せられているにすぎない。Cervantes 2015: I. 25. 242.
- 43) もともとはカルデーニオの持ち物であった。そこに書き付けたものを、誰か字の書ける者に見せ、清書を依頼するという段取りになっていたのである。
- 44) 得業士サンソン・カラスコが、シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリの手になるドン・キホーテの物語(すなわち『ドン・キホーテ』前篇)が評判になっていることに触れたさい、歴史家は、真実をありのままに記すものだと述べたことを受けて、サンチョ・パンサは、さまざまな合戦のさなか、主人が何度となく棍棒で打擲されたのと同様、自分も棍棒で殴られたことを克明に覚えているという。

- 45) 見かたによっては、駆使されたのは、記憶力よりもむしろ観察力であったとって然るべきかもしれない。
- 46) この物語については、前篇第五章においても言及されていた。ロペ・デ・ベガの悲喜劇『マントウアの侯爵』（1619年）などの場合と同様、材源となっているのは、シャルルマーニュの十二騎士の事蹟を主題とするロマンセである。
- 47) 当初、自分も難行苦行を強いられることになるのではないかという危惧の念を抱いたサンチョは、そのような誓いそのものに反対してははずであった。
- 48) 前篇第六章で司祭と床屋が調査するドン・キホーテの蔵書一覧として、このジャンルの主要作品が列挙される。登場人物たちの言葉を通して、『アマディース・デ・ガウラ』以外の多くの書物が焚書とされて当然だとされているのたいて、章の後半において挙げられる韻文や散文——セルバンテス自身の『ラ・ガラテア』（1585年）を含む——は、残しておくに値する優れた文学作品だと考えられているようである。 Cervantes 2015: I. 6. 60-69.
- 49) 司祭が次のように語る。「この善良な郷士は、彼の狂気にかかわるとなると、くだらぬことばかり話すのですが、いったんそれを離れて、他のことを論じるとなれば、きちんと理屈に合ったことを述べ、あらゆることにたいして、明瞭で、穏やかな理解力を示すのです。ですから、彼の特意とする騎士道に触れない限り、このひとを実に優れた理解力の持ち主だと思わない者はありますまい。」 Cervantes 2015: I. 30. 309. Cf. Auerbach 2003: 348.
- 50) 「……この偉大な物語の進展のあいだにしばしば述べられたように、ただ騎士道に触れるときにだけ、彼〔ドン・キホーテ〕は莫迦げたことを話すのであって、その他のことを論じるときには、彼が明瞭でなら偏りのない理解力の持ち主であることを示した。それゆえ、ことあるごとに彼の行動は彼の判断力を信じるに足りないものとし、彼の判断力は彼の行動を信じるに足りないものとしたのだった。」 Cervantes 2015: II. 43. 871.
- 51) 「今日という、われわれの世界を救えるかもしれない数少ないことのひとつが、〈苦痛からの解放〉、あらゆる残虐行為の完全かつ恒久的な非合法化だと考えられる時代において、このような状況下で私が、この長篇小説中のいわゆるおかしみのうちにある残虐性にたいして注意を促したのは、正当なことであるように思われた」とナボコフは述べている。 Nabokov 1983: 75.
- 52) 講義原稿の編纂者であるパワーズによれば、この見解がグルーサックに依拠したものであることをナボコフは欄外に註記していた。 Nabokov 1983: 111.
- 53) 講義原稿の編纂者であるパワーズによれば、この見解がマダリアーガに依拠したものであること（それにかなり手を加えたものであること）をナボコフは欄外に註記していた。
- 54) そもそも原典において、ドン・キホーテの像は「影のような多様化」を被っていたとナボコフはいう。その亡霊には「少なくとも七種類の色調」があるとされる。（1）本来のセニョール・キハーナ。（2）反定立的存在であるドン・キホーテと総合された、臨終の床にある、「善人」と呼ばれるキハーノ。（3）書物に「実話」という趣を与えるため、前提とされている「本来的」、「歴史的」なドン・キホーテ。（4）シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリによって描かれたドン・キホーテ。（5）前篇における「憂い顔の騎士」に対置される後篇の「猛きライオンの騎士」としてのドン・キホーテ。（6）カラスコによって語られるドン・キホーテ。（7）真の後篇の背後にある、アベリャネーダによる偽の続篇に登場する粗野なドン・キホーテ。 Nabokov 1983: 112.

参考文献

- Auerbach, Erich. 2003. *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*. Translated from the German by Willard R. Trask. With a new introduction by Edward W. Said. 1953; Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Boyd, Brian. 1991. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Cervantes, Miguel de. 2015. *Don Quijote de la Mancha* (Edición conmemorativa de la RAE y la ASALE). 2004; Madrid: Alfaguara.

- . 2006. *Don Quixote*. Trans. J. M. Cohen. With an afterword by Ned Helley. 1947; London: Pan Macmillan.
- . 1949. *The Ingenious Gentleman Don Quixote de la Mancha*. Trans. Samuel Putnam. New York: The Viking Press.
- . 1951. *The Portable Cervantes*. Trans. and edited with an introduction and notes by Samuel Putnam. New York: The Viking Press.
- Close, Anthony J. 1990. *Cervantes: Don Quixote*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dolinin, Alexander. 1999. "Clio Laughs Last: Nabokov's Answer to Historicism." In *Nabokov and his Fiction: New Perspectives*. Ed. Julian W. Connolly. Cambridge: Cambridge University Press. 197-215.
- Echevarría, Roberto González, ed. 2005. *Cervantes' Don Quixote: A Casebook*. New York: Oxford University Press.
- El Saffar, Ruth. 1974. *Distance and Control in Don Quixote: A Study in Narrative Technique*. Chapel Hill: The Department of Romance Studies at the University of North Carolina.
- El Saffar, Ruth Anthony, and Diana de Armas Wilson, eds. 1993. *Quixotic Desire: Psychoanalytic Perspectives on Cervantes*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Fiddian, Robin W. 2017. *Postcolonial Borges: Argument and Artistry*. Oxford: Oxford University Press.
- Gibson, Andrew, 1990. *Reading Narrative Discourse: Studies in the Novel from Cervantes to Beckett*. London: Palgrave Macmillan.
- Karlinsky, Simon, ed. 2001. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. 1979; Revised and Expanded Edition, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Kunce, Catherine, 1993. "Cruel and Crude": Nabokov Reading Cervantes." *Cervantes: Bulletin of the Cervantes Society of America*. 13. 2, 93-104.
- Levin, Harry. 1995. "Lectures on Don Quixote." In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York and London: Garland Publishing, Inc., 226-34.
- Logie, Ilse. 2018. "Vladimir Nabokov on *Don Quixote*: 'A Veritable Encyclopedia of Cruelty.'" In *Nabokov's Lectures on Literature: Portraits of the Artist as Reader and Teacher*. Ed. Ben Dhooge and Jürgen Pieters. Leiden, Boston: Brill Rodopi, 44-59.
- Nabokov, Vladimir. 1983. *Lectures on Don Quixote*. Ed. Fredson Bowers. Foreword by Guy Davenport. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark.
- . 1980. *Lectures on Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark.
- . 1981. *Lectures on Russian Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark.
- . 1990. *Strong Opinions*. 1973; New York: Vintage International.
- Parker, Barbara Keevil and Duane F. Parker. 2003. *Miguel de Cervantes*. Philadelphia: Chelsea House Publishers.
- Shakespeare, William. 1988. *The Complete Works*. Ed. Stanley Wells and Gary Taylor. Oxford: Clarendon Press.
- White, Duncan. 2017. *Nabokov and his Books: Between Late Modernism and the Literary Marketplace*. Oxford: Oxford University Press.